



TITLE:

# [国際シンポジウム/ワークショップ] ] 歓迎の辞

AUTHOR(S):

ダルスマン

---

CITATION:

ダルスマン. [国際シンポジウム/ワークショップ] 歓迎の辞. CIAS discussion paper No.25 : 災害遺産と創造的復興 : 地域情報学の知見を活用して 2012, 25: 36-36

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228529>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

## 歓迎の辞

ダルスマン(シアクアラ大学副総長)

Darusman (Pembantu Rektor IV, Universitas Syiah Kuala)



京都大学地域研究統合情報センターよりお越しの林行夫先生、柳澤雅之先生、山本博之先生をはじめとする京都大学からのみなさま、また JICA (国際協力機構) からご参加の遠藤清美さん、京都大学東南アジア研究所の浜元聡子さん、シアクアラ大学の防災研究専攻の大学院生のみなさん、シアクアラ大学津波防災研究センターのディルハムシャ先生ほかアチェ州政府の各部局の方がた、本日はありがとうございます。

本来なら学長がまいるところですが、本日はアチェの外におり残念ながら出席できません。代わって、副学長である私がお挨拶をさせていただきます。シアクアラ大学のすべての教員、学生を代表して、本国際シンポジウムにお越しくださいましたみなさまに歓迎の辞を述べます。

7年前を思い起こしますと、私たちはあの日、すべてのものを失いました。家族、知人、財産、そして貴重な情報、データもまた失われました。情報はたいへん重要です。私たちは、津波とその後の復興についての情報を集めていく必要があります。また、ただ集めるだけではなく、データベースなどにすることで、さまざまな人びと——国内の人だけではなく国外の人も含めた世界中の人びとにきちんと伝わるよう、共有される仕組みが必要だと考えています。津波以降に生じた事柄に関する情報もたくさんあります。それらの情報もきちんと整理して、さまざまな人びとに共有される経験となるようにしたいと考えています。

それらの情報やデータをきちんと整理するうえで、情報技術の利用は欠かせません。また、そのうえでは地域情報学の知見も必要です。加えて、それぞれの地域の文化や社会に対する深い理解が必要であると思っています。

私どもシアクアラ大学が防災研究の拠点として創設した津波防災研究センターが、これらのデータを取りまとめて整理し、世界に発信するうえでの拠点となることを願ってやみません。津波防災研究センターがネットワークを拡げ、インドネシア国内だけでなく国外のさまざまな機関、研究者、社会と密接な関係をつくりながらネットワークを拡げることを願っています。本日のこの機会は、津波防災研究センターが京都大学地域研究統合情報センターとネットワークを結ぶまさにそのときであると考えています。

また、本日のシンポジウムを支援していただいた「JST-JICA 地球規模課題対応国際科学技術協力事業・インドネシアにおける地震火山の総合防災策」には深く感謝の言葉を申し上げたいと思います。

私たちは、このようにして津波防災研究センターと京都大学地域研究統合情報センターが協力関係を発展させることを歓迎し、大きな期待を寄せています。本日を一つの大きな契機として、津波防災研究センターが災害対応や災害の影響に関する情報を整理し、将来災害を迎えるであろうさまざまな地域社会の人びとにとって共有すべき経験が発信されることを願っています。

本日のシンポジウムを通じて、ご参加のみなさまが大きな成果を得られること、また、本日の場に來られなかった方がたにもその成果を共有すべくそれぞれの方がたが活動されることを願っています。それらは情報技術の活用を通じてより円滑に進められることだと思います。研究者も一般の人びとも、また、日本からの参加者のみなさまもインドネシアからの参加者のみなさまも、さまざまな人びとがこの場に集い、それぞれがアイデアを持ちよることで、今後の大きな教訓や学びを得られるとよいと思っています。

本シンポジウム・ワークショップの成果を通じて、アチェにあるさまざまな貴重な情報でまだきちんと扱われていないものが発見され、活用され、整理されることを期待しています。